

## 山梨県南アルプス市（視察日：令和6年7月2日） 小中学校の給食費及び保育料の無償化について

### 1 南アルプス市の概要

人口約69,000人。甲府盆地の西部に位置し、東側の平坦太西側の山間部に大きく二分される。美しい自然に囲まれた、果樹栽培が盛んな地域である。

### 2 視察目的

子育て支援に力を入れている南アルプス市の様々な事業の中で、当市では財政面などから実施していない小中学校の給食費無償化及び保育料の無償化（0～2歳児）について、施策の導入経緯や費用対効果などを学ぶことを目的とした。

### 3 視察内容

- (1) 南アルプス市の主な子育て支援としては保育料無償、市立小中学校の給食費無償、18歳まで医療費無料、おむつ用品等支給、一時預かり保育無償、産前産後ケアセンターの補助などがある。
- (2) 「こども・子育て応援宣言」をしている。
- (3) 市立小中学校の給食費無償化について
  - ① 南アルプス市では、子育て支援の一環として、現在、南アルプス市立小中学校に通う児童・生徒の学校給食費を令和4年11月より無償化している。学校給食の賄い材料費として本来保護者から頂く学校給食費の小学校で1食318円、中学校で1食360円を市で負担。
  - ② 学校給食費等補助金の制度を設けている。対象者は、市立小中学校、特別支援学校（小中学部）や市外公立小中学校に通学し、通学先で給食やお弁当等を食べている児童・生徒の保護者や食物アレルギー等を理由に学校給食を全く食べられず、通学先で毎食お弁当を食べている児童・生徒の保護者、そして、南アルプス市教育支援センターやフリースクールに通所し、在学している学校の学校長に指導要録上出席していると認められ、かつ、通所先でお弁当を食べている児童・生徒の保護者に対し、市立小中学校の学校給食費に相当する額を限度として補助している。市民の声や公平性の観点からこの制度を設けた。
  - ③ 無償化に至った経緯としては、平成28年及び令和4年の議員代表質問がきっかけとなり、物価高騰で子育て世代の負担が多いことから、最終的には市長の子育て支援最優先の思いから実現した。
  - ④ 令和6年度予算では、無償化対象者5,406名（小学3,556名、中学1,850名）、学校給食費等補助金支給者189件（小学94件、中学95件）。学校給食の賄い材料費として約4億円の予算（本年4月値上げ）。ふるさと納税や企業誘

致を図り、財源を作り出すとしている。

- ⑤ 給食センターは防災施設としての役割を持ち、災害時の炊き出し機能や備蓄用食品倉庫がある。

#### (4) 保育料の無償化について

- ① 県の補助として平成28年4月より第2子以降3歳までの保育料無償化が実施され、国の支援においては、令和元年10月から3歳から5歳までの無償化が実施された。南アルプス市としては、完全無償化のため残された0歳から2歳までの第1子の無償化を令和4年4月より実施した。
- ② 財政難で実施できない市町村が多い中、市長の「子育て支援最優先」の思いの中で実施された。
- ③ 市として今までは、国の定める公定価格の本来の保育料保護者負担分より低く保護者負担を設定して、国基準との差額を市の自主的な持出しとしてきた。その保護者負担分約1億円が無償化として市の財政負担となる。
- ④ 年間出生数は約550人。10年前の約600人から見た時には毎年1%の割合で減少している。しかしながら、小学校入学時には約1割増の600人くらいになっている。これは若い方の転入増が影響しているのではないかとのこと。

## 4 所 感

子育て支援充実のためには、予算に関する問題がある。そんな中で、南アルプス市では「こども・子育て応援宣言」を令和5年3月5日に宣言。子育てするなら南アルプス市と思ってもらえるような様々な子育て支援を実施している。市立小中学校の給食費無償化については、定例会においての議員の代表質問が2回繰り返され、その思いとともに、「こども・子育て応援宣言」をしたように、市長の子育て支援についての決意が感じられた。同じように保育料の無償化についても市長の「子育て支援最優先」の思いが強かったようで、子育て支援に関しては、財政面での問題がある中で、南アルプス市は非常に頑張っていると感じた。最終的には、市長の子育てに関する思いと決断にある。

分娩施設がない中で、転入超過がみられ、出生数も約550人を維持している。理由として、詳細な分析はしていないようだが、周辺自治体と比べ土地価格が安く、高速道路の整備や商業施設の開発も進んできている中、子育て支援の充実や「こども・子育て応援宣言」も大きいのではないかと。

当市においても、小中学校の給食費無償化、保育料の無償化（0～2歳児）については、実現できるように国や県に対しても要望するとともに、財政措置の検討を行い少しでも前に進むことを望むものである。

# 山梨県韮崎市（視察日：令和6年7月3日） 青少年育成プラザ「ミアキス」について

## 1 韮崎市の概要

山梨県北西部に位置し、甲府盆地北西端に属する。やや横長の市域で、東西は南アルプス国立公園に属する山地や丘陵地となっている。人口は27,986人、世帯数は12,876世帯（令和6年4月現在）。甲府盆地を越えて、御坂山塊の上に、日本の象徴である雄大な「富士山」を望むことができる。

## 2 視察目的

韮崎市民交流センター NICORIーニコリーの地下1階に青少年育成プラザであるMIACISーミアキスーがある。ミアキスは中高生の居場所「第三の居場所」として2016年にオープンした。中高生の交流拠点であり、中高生の自主的な活動を応援する山梨県内初の施設である。

小千谷市でも中心市街地の賑わいの創出をめざし図書館等複合施設「ホントカ。」が本年9月にオープンし、その中には、中高生の「居場所」づくりも構想されている。そのような中で、青少年育成プラザであるミアキスの取り組みや運用の仕方、利用状況、中高生の反応等について学ぶ。

## 3 視察内容

### (1) ミアキス設置に至った経緯について

総合戦略策定会議において、県外に進学後、卒業しても韮崎市に戻る若者が減少していることが課題となり、解決するための取り組みを審議していたところ。韮崎市出身の大村智博士が、ノーベル医学・生理学賞を受賞した。大村博士の「ここがあるから、僕の明日がある」とふるさと韮崎への愛着を込めた言葉は、市民に「韮崎」への誇りを強く認識させるきっかけとなった。そのため、「韮崎」への誇りの高まりを背景に、中高生の頃から、韮崎への認識を深めることにより「にらさき愛」を強め、進学後も「韮崎」に回帰し、「働くなら韮崎市。子育てするなら韮崎市」という素地を作る環境整備に取り組むこととなった。

### (2) 取り組みや運営方法（中高生スタッフ、スタッフの役割も含め）について

- ① 安心安全な居場所づくり。
- ② 地域資源との橋渡し及び相談や伴走支援等。
- ③ 中高生はユースカウンスル（若者協議会）として運営に参画。

### (3) 利用人数や状況（一番多い過ごし方や好評なイベント等）について

- ① 平日20～50人、休日40～70人くらい利用。
- ② 勉強や遊び、交流などの過ごし方が多い。
- ③ イベントは中高生企画のスポーツ大会などが人気

### (4) ミアキス設置の最大のメリットについて

- ① 登録者、利用者数ともにコロナ前に戻り、年々趣向を凝らした企画運営で、中高生

の「第3の居場所」としてあらゆる物事のきっかけ作りを提供している。

② 相談事やコミュニケーションを通じて中高生とスタッフの関係性が構築されている。

(5) 問題点について

地域おこし協力隊制度を使っているためスタッフの入れ替えが多く、卒業後の継続的な関係性の構築に苦労している。

(6) ミアキスを利用している中高生の所在地はJR駅との間にあるなど地理的に有利な条件の有無について

① 市内に2校ある中学や高校どちらからも利用しやすく、市外の学校に通う学生も駅から極めて近い立地である。

② ミアキスのある市民交流センターは、駐車場もあるため保護者が送迎する場合にも便利である。

(7) 高校生が考える夢を叶えるアイデアコンテストSparkについて

1. じぶんの「可能性を広げる」アイデア

2. いまを最高に「楽しむ」アイデア

3. あの人を「喜ばせる」アイデア

この3つを募集テーマとし、実現したい夢を高校生がプレゼンし、選ばれた人に活動資金17万円が提供されるというプロジェクトを開催。財源は企業版ふるさと納税。

## 4 所 感

「らしさ、無制限」。一中高生は、ミアキスのように何者にも進化していける存在一施設の名前である「ミアキス」は、「約6,500万年前に生息していた動物の名前。同じ環境下にいながら、大草原を目指したものはイヌ科へと、そのままの残り生活を続けたものはネコ科に進化を遂げたと言われています。

まさに、中高生も、ミアキスのように自分の選択次第で何者にも進化し得る可能性を持つ存在。中高生自身が自分の扉をひらくカギを握り、まだ見ぬその先に期待しながら進んでいってほしい。ミアキスは、そんな思いのもと、中高生と地域、大人、社会とをつなぐ「ツギテ」を次々と生み出していくことを目指しています。」と紹介されている。

2016年10月にオープンして、今年で8年目に入る中高生の居場所「ミアキス」。元々は、中高生の居場所づくりを構想しているとき、ニコリの地下が空いているということで、行政とNPO法人「河原部社」が協働して始まった。ミアキスの運営は、基本的には河原部社（理事長：西田遙氏）が担っている。平均年齢30歳のスタッフ6人と大学生ボランティア4名の10名で運営している。スタッフは副業（フリーライター、デザイナー、桃農家など）を持っている。

「自分たちの居る所を自分たちで作っていく」、何も無いところからスタートし、みんなと一緒に作ってきた。

「らしさ、無制限」をコンセプトに、中高生の公共施設、人口減少対策事業として、60席あるスペースは満席になることも多いという。使い方はさまざまで、交流、遊び、勉強、大学生サポーターとの対話等々。また、月3回、イベントを行っている。大人が

考えたイベントに中高生は来ない、ということでミアキスマネージャー（高校生等）27名がユースカウンスル（若者協議会）として活動している。①「全員参加」、②「スパーク（情熱、興味、能力）」、③「学校への参画」を目標に、1日平均37人が利用している。韮崎市内の中高生の約6割がミアキスに登録している。

年間の事業費は合計で約3,500万円。地域おこし協力隊制度で約1,500万円、行政（韮崎市）からは約2,000万円で運営されている。

河原部社が、中高生と地域、大人、社会との「ツギテ役」を果たしていることがよく理解できた。「ユースの可能性を拡大し、中高生時代のよい記憶を増やしたい」という西田遙氏の含蓄のある言葉に地域の生き残りをかけた熱い想いが伝わってきた。

中高生との関わりに意欲があり、経験値あるリーダーなどが一生懸命運営していると感じた。そうしたなかで様々な工夫も生まれる。中高生の声を大切にした運営で生き生きとした雰囲気が伝わる。職場体験も出来る（受け入れ70社）。当市でも場所だけではなく中高生に寄り添える十分なサポーターの配置が重要だと感じる。

ミアキスでは多くのイベントを開催しているが、管理運営のNPO法人河原部社の方が「大人が考えたイベントには子供たちは集まらない。自分たちで考えたことが大事であり、一緒に作っていくことを大事にしている。企画の段階で子どもたちに入ってもらっている」との話があり、子供たちの意見ややりたいことをよく聞いていると感じた。当市でも「ホントカ。」において様々なイベントが開催されると思うが、この言葉は大事にしたい。

高校生アイデアコンテストSparkなども開催し、夢を叶えるプロジェクトも実施し、素晴らしい施設と思うとともに共感が持てた。

実際にミアキスを視察させていただいたが、中高生が思い思いに過ごしており、居場所として定着している様子が伺えた。ホントカ。がミアキスのような若者の居場所になる仕掛けをミアキスの取り組みに大いに学べると感じた。

# 長野県長野市（視察日：令和6年7月4日） 不登校児童生徒やその保護者に対する支援について

## 1 長野市の概要

長野県の北信地方にある県内で最も人口が多い市であり、長野県の県庁所在地、中核市に指定されている。北信濃の山並みに囲まれた善光寺を中心に発展してきた。人口363,342人、世帯数164,420世帯（令和6年4月現在）。

## 2 視察目的

長野市では、市内7か所に教育支援センターを設置して、学校へ行きにくくなったり、行けない状態が続いたりしている小・中学生に対して社会的自立に向けた支援を行っているが、施設が狭あいなどで新たな受け入れが困難な状況であった。そこで、長野市立七二会小学校笹平分校を改修し、新たな受け入れができる施設として8か所目の教育支援センターS a S a L A N D（ササランド）を令和6年4月にオープンした。

S a S a L A N Dの運営にあたっては、親の会、信州大学教育学部、七二会地区住民自治協議会、民間団体などで構成したS a S aサポーターミーティング（運営協議会）を設置し、子どもたちの意見を参考にしながら活動内容などについて協議している。

令和4年度の小・中学校における不登校児童生徒数は30万人に迫る勢いで過去最多となった。小千谷市でも、不登校の発生率は小学校1.53%、中学校5.96%と、ほぼ全国の平均（小学校1.70%、中学校5.98%）と同じ状況である。不登校対策は急務の教育課題である。そのような状況下で、長野市では教育支援センターS a S a L A N Dが開設された。不登校児童生徒等の社会的自立に向けた支援及びその保護者に対する支援にかかる取り組み全般、施策及び状況について学ぶ。

## 3 視察内容

### （1）不登校児童生徒数の推移（令和4年度）

- ① 市小学校不登校児童数 284人
- ② 市中学校不登校生徒数 525人
- ③ 市1000人あたり不登校生徒数 30.4人

### （2）教育支援センターとS a S a L A N Dの違いや役割

- ① S a S a L A N Dは、市内7か所にある教育支援センターの中核的役割を果たしている。
- ② 1日平均約30名が利用している。

### （3）S a S a L A N Dの3つの柱

- ① 子どもたちの社会的自立に向けた支援  
多様な活動機会の提供（教室、共有スペース、中庭、校庭、体育館）、メタバースを活用したオンライン活動、七二会（なにあい）地域や近隣校との連携、栄養バランスのよい食事（ランチ）の提供
- ② 保護者への支援
- ③ 教職員等の不登校に係わる研修

#### (4) 保護者への支援

- ① 目的：不登校の子どもを持つ親の孤独感の軽減、子ども支援に有効な知識・技能の獲得
- ② 親同士の語り場の開設、不登校児童生徒保護者への定期的な情報提供、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等の専門家による個別面談

#### (5) メタバースを活用したオンライン活動

- ① メタバース S a S a L A N D 概要  
信州大学教育学部三和准教授と学生が作成  
使用ソフトは M i n e c r a f t (マインクラフト) 教育版
- ② メタバース S a S a L A N D の利用実態  
活動日 週3日 (火・木・金) 9時30分～11時30分  
活動内容 建築、戦い、冒険、鬼ごっこなど
- ③ S a S a L A N D で参加する子どもが多い

#### (6) S a S a L A N D の利用児童生徒・保護者の声

- ① 信大生との関わりやメタバース体験、新鮮な場所での生活はオアシスのようです。
- ② 沢山の人たちと関わりを持てるようになり、今までにない経験や世界観に触れることが出来て本人たちの考え方や世界観が広がったように感じます。
- ③ 毎日行きたいくらいと話しています。自由な所、大好きなマイクラができること、広いので人が密集せず静かであること、学校では食べられなかった給食が S a S a L A N D なら安心して食べられること、スタッフが優しいこと。とても楽しんでいる様子です。

## 4 所 感

S a S a L A N D のコンセプトは、次のとおりである。

～子どもたちが安心を実感できる居場所～を目指し、①「自分らしくいられる」(自己決定、自己実現を応援する場所)、②「自分を受け入れてもらえる」(自分を理解してくれる大人に見守られる権利、自分の話を聞いてくれる場所)、③「自分のペースで学べる」(「何もしない」もOKな場所、メタバース内で自宅から通える場所)、④「保護者の気持ちと和らぐ」(心理や福祉等の専門家に相談できる場所、保護者同士が繋がり話し合える場所)、⑤大人が理解を深められる(保護者、教職員、地域住民が学べる場所)となっている。

S a S a L A N D の一日のスケジュールは、【一日の活動は子どもが自ら選び自ら学ぶ】として、ランチをはさみ、午前、午後とも活動となっている。スタッフと子どもが活動内容を相談し、個別活動もOKである。活動内容は、①農業(トマト、ジャガイモ、ニンジン、大豆他)、②飼育(ヤギ飼育、昆虫採集)、③野外活動(自然体験、火起こし体験、野外炊事)、④調理加工(豆腐作り、おやきづくり、そば打ち、餅つき、五平餅)、⑤レクリエーション(将棋、ボードゲーム)、⑥ICT(プログラミング)、⑦運動(バスケットボール、ボルダリング、ヨガ、ダンス等)、⑧学習(自学自習)、⑨個別活動(読書、メタバース、イラスト、楽器演奏、何もしない、ゲーム)となっている。

学校のような時間割はなく、時間の配分は子どもたちが選ぶ。子ども一人ひとりが安心して過ごせるスペースで活動をする。スタッフは、子どもの「やりたい」を引き出すアドバイスをして、「やりたくない」という子どもにも配慮する、という。

また、カウンター席を設けて、ランチ、勉強、おしゃべり等、何をするのも自由な空間を作ったら、いつも塞がっているとのことであった。

令和6年4月に開校したばかりで、実際にS a S a LANDを見学することはできず、残念であった。しかし、長野市教育委員会の佐久間清也学校教育課長の説明で、その理念、活動内容等はよく理解できた。川崎市子ども夢パークと重なり合う部分が多くあった。実際に、川崎市子ども夢パークの西野博之理事長にも講演に来て頂いたこともあるということであった。従来の教育支援センターと異なり、「第三の居場所」としての役割を果たしていると感じた。

名実ともに子どもを主体にした施設であると感じた。チャイムを鳴らさず行動を制限しないことや名前はニックネームで呼びあうことなど従来の学校の概念にとらわれない運営に感銘を受けた。施設内のレイアウトや設備など自由な環境で過ごせることを優先したつくりなども子どもファーストを感じた。またメタバースを利用した学校参加についてもそこから学校環境を身近に感じやがては登校する気にさせる施策もとても考えている。様々な施策により学校や友達を身近に感じ不登校からの脱却を促す仕組み作りを実感した。

学校に行きにくくなっている子どもの受け皿としては、必要なスタイルであり、このような居場所も必要と感じた。まさしく、S a S a LANDのコンセプトにあるような「子どもたちが安心を実感できる居場所」として、機能しているようだ。

コロナ禍以降、当市に於いても不登校児童生徒は増加傾向にあり、社会問題でもあると感じている。教育県でもある長野県の中心にある長野市では教育支援センターを既に7箇所設置され、S a S a LANDは8番目である。特徴としてメタバースなど仮想空間で繋がりを持つなどオンラインを有効に活用している。

不登校の原因は様々な要因があると考え、少しずつコミュニケーションを図り繋がり社会参画出来るように、行政・学校・地元自治会、民間団体が相互に連携を図る事で子ども支援の強みを感じた。

当市は1箇所だけの教育センターのみであるが、廃校や閉鎖になった保育園など施設は存在するので設置に向け検討の余地はあると考える。

閉校となった校舎を改修し、子どもが来たくなる施設を作り上げている点が印象的であった。当市でも子どもの数が減少することによる小中学校の統廃合は将来的に避けて通れない課題であるが、閉校となった校舎の利用も含め不登校児童生徒の支援は包括的に考えるべきであると感じる。スタバをイメージして作ったカウンターには、大人がやりたいこと＝子どもがやりたいことというシンプルな思いが印象的であった。